

おわりに

広島は被爆から79年が経過しました。

年月を経て寄贈された資料は、被爆の記憶と共に世代を超えて大切に受け継がれた証でもあります。その一方で、資料の中には家族に当時の状況が伝わっていないものもあります。

それは、被爆者があの日の惨状を自身の胸にとどめ、辛い記憶を1人で背負って生きてきたことを示しているのかもしれません。

あの日を境に何もかもが変わりました。資料を前に彼ら・彼女らが過ごした日常を想像し、それぞれの声に向き合う時、「決して繰り返してはならない」との強い思いが心に刻まれます。

展示資料のうち、パンフレットに掲載しきれなかった資料の寄贈者など関係者の方のお名前。
(順不同、敬称略)

友竹晋太郎、日比由夫、仲典子、今岡博信、村輿久美子、相原謙次、伊勢榮一、川口喬、益本卓至、本多美佐、上竹和子、沖田完二、米田清、米田清莊、土井玲子、野村道子、伊藤周子、大中稔文、尾糠政美、James F. Nolan、James L. Nolan, Jr.、Marshall Lovett and Yuk Lovett、辺見榮、島本学、長岡省吾

上記の方々のほか、広島市立段原中学校、坂田篤信、安郷土史懇話会 立川元英、大屋理容院、西本雅実、中国新聞社、日本写真保存センター、朝日新聞社 など多くの方々、機関のご協力をいただきました。

広島平和記念資料館 令和6年度第1回企画展

新着資料展 ―令和4年度寄贈資料―

期間 2024年(令和6年)9月13日(金)～2025年(令和7年)2月25日(火)

会場 広島平和記念資料館 東館1階 企画展示室

発行 広島平和記念資料館 学芸課

〒730-0811 広島市中区中島町1-2

TEL 082-241-4004 FAX 082-542-7941 <https://hpmmuseum.jp/>

広島平和記念資料館令和6年度第1回企画展

新着資料展

―令和4年度寄贈資料―



救護活動に従事した軍人の水筒／新井好雄寄贈

はじめに

広島平和記念資料館には毎年、被爆者や遺族の方々などから被爆に関連した資料が寄贈されています。寄贈された資料は被爆前後の人や街の様子を浮かび上がらせます。

この展示会では、令和4年度に寄贈された955点の資料の中から、134点を紹介します。

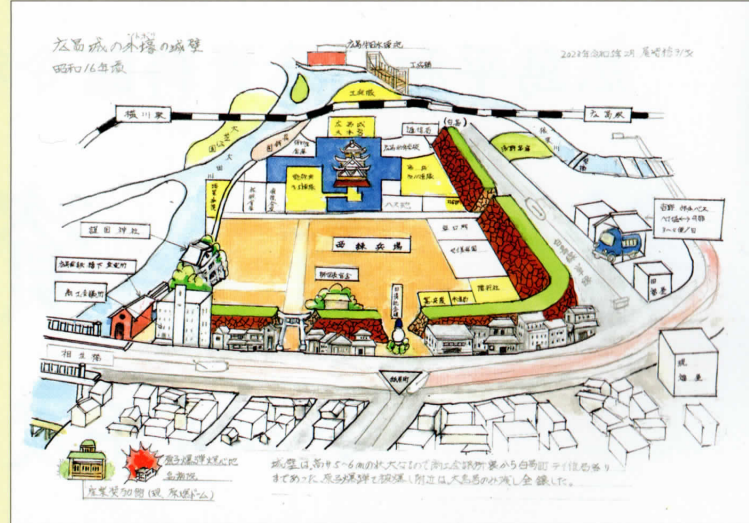
展示の初めに今もなお描き続けられる「原爆の絵」を通じて被爆者の思いに触れ、その後、被爆前から被爆後の様子を伝える資料を基に当時の状況を振り返ります。

広島で原子爆弾の被害に遭った人々それぞれに、今を生きる私たちと同じような日常がありました。家族と共に喜び、悲しみ、大切な人を想う——そんな人々の日常を一瞬で奪っていった原子爆弾の脅威を、当館に新たに寄せられた資料を通して伝えます。

描き続ける

市民が描いた「原爆の絵」は、1974年（昭和49年）～1975年（昭和50年）と2002年（平成14年）に大規模な募集が行われ、合計約3,600枚の絵が寄せられました。その後、被爆から80年近くが経過した今日に至るまで描き続けられています。

新たに寄贈された絵は、自分が過ごしたかつての街並み、あの日経験し目撃した光景、亡くなった家族や同級生の姿——「記録を残し、次の世代に伝えなければ」という想いを込めて90代となった被爆者が、記憶をたどりながら描いたものです。



広島城の外壕の城壁

1941年（昭和16年）ごろ 基町
尾崎稔作（被爆時の年齢13歳/絵を描いた年齢91歳）

この絵は尾崎さんが、記憶を基に被爆前の爆心地から北側の街並みを描いたものです。

ピカにやられた英雄ちゃん3 あの日

1945年（昭和20年）8月15日 安芸郡坂村 国鉄坂駅前
西岡誠吾作（被爆時の年齢13歳/寄贈時の年齢91歳）

この絵は西岡さんの家の近所に住んでいた
国民学校1年生の英雄ちゃんを偲んで描いたものです。

坂駅前で、英雄ちゃんのお母さんとお姉ちゃんを見つけました。
おばちゃんは「英雄は死んだんよ。最後の最後まであんたの名前を呼んでいたよ。」

私は、英雄ちゃんの死を聞き、家族の無事を知った喜びは吹き飛びました。
(作者の言葉から)



妹が見た原爆の光

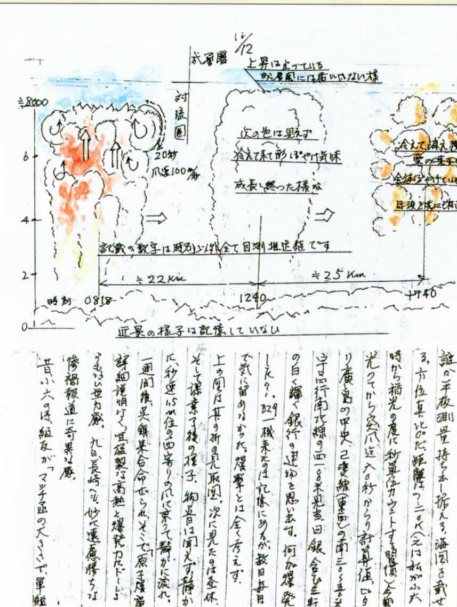
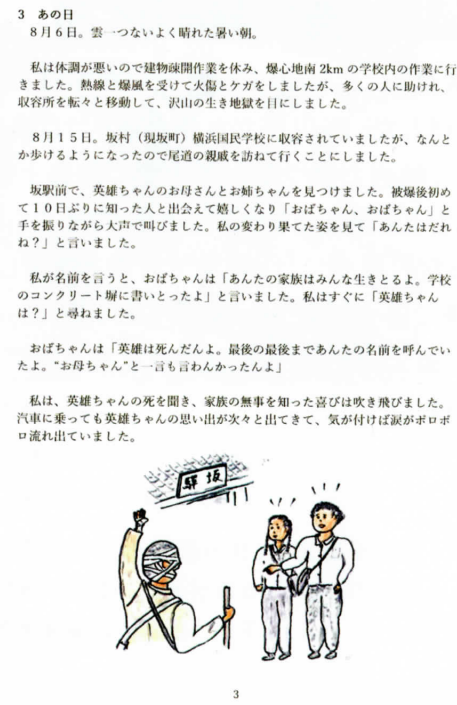
1945年（昭和20年）8月6日 牛田町 二葉山
切明千枝子作（被爆時の年齢15歳/寄贈時の年齢92歳）
広島市立長束中学校寄贈

私の妹が今の広島駅の北口の方で作業をしていて見た、
原爆が落ちた瞬間の「ものすごい光」。
七色の光が筋になって真っすぐに光りながら、輝きながら天に昇っていった…
(作者の言葉から)

立ち上るきのこ雲

1945年（昭和20年）8月6日
午前8時18分～午後5時40分 呉市（海軍基地）
下村喬作（被爆時の年齢22歳/寄贈時の年齢99歳）

ピカーツ! 強烈な青白い光全面に…
再び新聞を見る途端今度はブワツ! 突風が吹き込んでくる。
…テーブル上の薬缶、湯呑み、冊子類が一斉に飛ばされる。
何事か? グラウンドへとび出してみると、北の方、巨大な入道雲
高さ7～8千米一本、上の方は鉢巻状に渦巻きながら噴き上がってゆく。
(作者の言葉から)



被爆前の街と人々の姿

被爆前、広島は活気にあふれ、賑わいを見せていました。商店が立ち並ぶ通りでは多くの人が行き交い、映画だけでなく、舞台での能の上演や謡曲をたしなむ人も増えるなど文化の広がりもみられました。

日常の風景には、職場で同僚と談笑したり、地域の行事で協力しあう人々の姿もありました。子どもたちは川で遊んだり、学校に通って友達と過ごす日々を送っていました。



平田屋町の本通り

1931年(昭和6年)～1943年(昭和18年)ごろ
爆心地から620m 平田屋町 益田崇教寄贈

本通りには数多くの店舗が並び、すずらん灯に照らされて、夜までにぎわいました。

下駄

爆心地から1,900m 二葉の里
松本幸子寄贈

寄贈者の松本幸子さんが細工町の丸米履物店で母親に買ってもらったものです。
幸子さんは猿楽町の自宅から、このお気に入りの下駄を履き、元安橋東詰めの和裁と洋裁の教室に通いました。



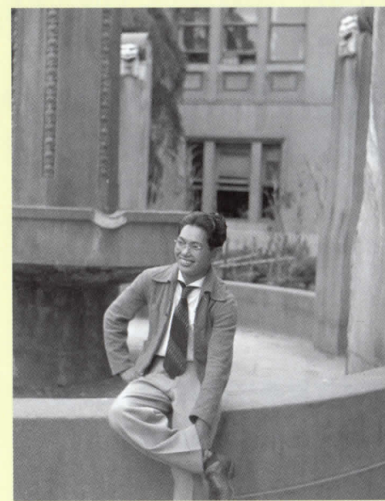
松本幸子さん



広島県産業奨励館内にあった事務所

1941年(昭和16年)～1942年(昭和17年)ごろ
爆心地から160m 猿楽町 古河秀雄撮影 古河秀治寄贈

広島県産業奨励館(現在の原爆ドーム)の2階の北側にあった日本貿易振興会社広島支店の事務室です。事務室の壁は白く、大きな窓があり、光がよく入りました。



産業奨励館の洋風庭園の噴水の前で

1941年(昭和16年)～1942年(昭和17年)ごろ
爆心地から160m 猿楽町 古河秀治寄贈

写真に写る古河秀雄さんは1941年(昭和16年)から日本貿易振興会社広島支店に勤務していました。

「カメラは当時貴重で、同僚の皆に「写せや～」と言われ、記念にひとり一人撮影し、それぞれに渡しました。」

(古河秀雄さんの証言ビデオより)



河原町の雁木で遊ぶ子どもたち

1939年(昭和14年)～1940年(昭和15年)ごろ
爆心地から1,100m 河原町 三田嘉一撮影 個人寄贈

雁木(階段状の船着き場)で撮影された写真です。
夏になるとこの辺りで子どもたちは泳いだり、飛び込みをしたりして遊んでいました。



猿楽町の岡野重商店の前で

1930年代後半～1940年代前半ごろ
爆心地から80m 猿楽町 原和子寄贈

岡野重商店は機械工具などの鉄製品を扱っていました。
左から店を営んでいた岡野重次郎さんの長女の和子さん、四女のヨネ子さん、二女の節子さんが写っています。

三宅一人さんの初舞台

1938年(昭和13年)11月3日
爆心地から550m 立町 豊嶋起久子寄贈

能楽師で人間国宝の豊嶋弥左衛門の弟・豊嶋豊さんの弟子・三宅一人さんが広島能舞台で初舞台を踏み、「敦盛」を演じた際の様子が写っています。

1945年(昭和20年)8月6日、一人さん(当時55歳)は自宅で被爆し、家の下敷きとなって焼死しました。



社殿の造営を祝う餅つき

1934年(昭和9年)ごろ
爆心地から370m 基町 益本嘉六提供

官祭広島招魂社(現在の広島護国神社)が広島駅近くの二葉の里から基町へ移転し、新社殿が造営された事を祝う餅つきの様子を撮影したものです。



広島市立第一国民学校校庭にて

1941年(昭和16年) 爆心地から2,600m 段原山崎町
矢野久美子寄贈

写真に写る校訓の「至誠勤勉」の石碑は広島市立段原中学校の敷地内に今も残っています。

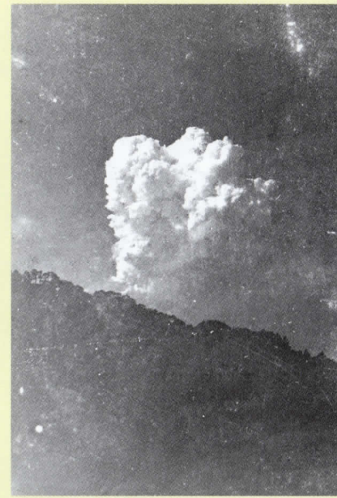


失われた命と変わり果てた街

広島県北部の実家を出て広島市内で下宿し、爆心直下の細工町にあった郵便局に勤務していた女性は、両親と手紙や葉書でやり取りをしていました。

「…私達も戦場と同じいつどんな事があるかわかりません。頭の上に落ちたらっぺんです。」

あの日、多くの尊い命が1発の原子爆弾によって犠牲になりました。賑わっていた街並みや人々の姿は瞬間になくなり、街は助けを求める人々で溢れました。



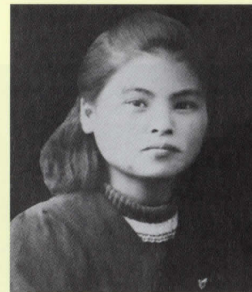
原爆投下後のきのこ雲 左:約15分後 右:約20分後

1945年(昭和20年)8月6日 爆心地から約40km

現在の安芸高田市美土里町本郷 織田吾郎撮影 水野夕美子寄贈



清水麗子さん



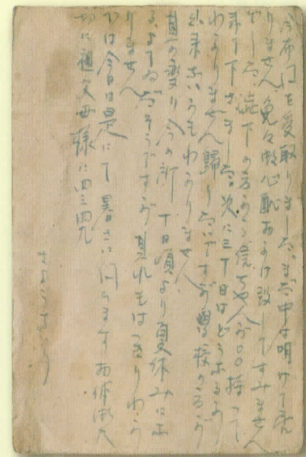
清水喜美子さん

家族へ送った葉書

清水貞之寄贈

原爆で亡くなった清水麗子さん(当時17歳)と清水喜美子さん(当時15歳)の姉妹が家族へ宛てたもの。

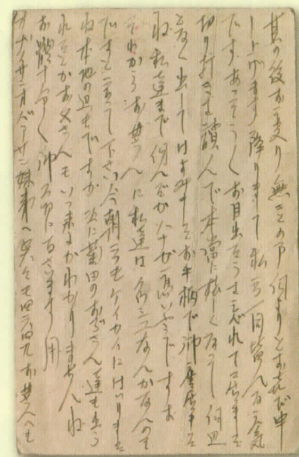
麗子さんと喜美子さんは実家のあった広島県北部の山県郡本地村から広島市内の親戚の家に下宿し、勤務先に通っていました。



麗子さんが母親のオセエさんへ宛てた葉書

1944年(昭和19年)7月27日

「今、布団を受け取りました。まだ中は開けておりません。色々御心配おかけ致してすみませんでした。」



喜美子さんが父親の博夫さんへ宛てた葉書

1945年(昭和20年)8月1日

「お母さんに私達はクウシユウなんかなんのそのですと言って下さい」

丸子芳江さんが書いた歌集

鵜川孝寄贈

丸子芳江さん(写真中央・当時21歳)は勤務先の日本銀行広島支店へ出勤途中に被爆したとみられ、現在も行方不明のままです。歌集の冒頭には「自分の身に何かあったら(婚約者の)桂さんに預けてほしい」と記されています。



丸子家の家族写真



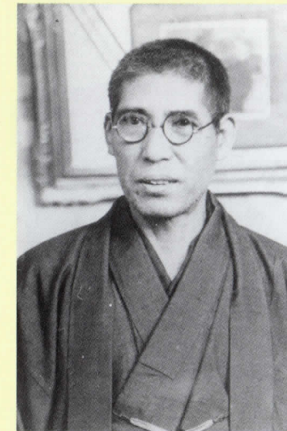
被爆した上衣

爆心地から1,300m 平塚町

久保朋行寄贈 資料撮影:土田ヒロミ

久保昭二さん(当時3歳)は、8月6日の朝、疎開先に行く父と兄を自宅2階の窓から見送っている時に被爆しました。

昭二さんは大火傷を負い、母親のツネさん(当時39歳)は治療のため、病院や温泉に連れて行きましたが、翌年5月5日に敗血症を発症し、16日に亡くなりました。この服は昭二さんが被爆時に着ていたもので、右首から右肩にかけて強く変色しています。



丸山守一さん



プライヤー

爆心地から330m 材木町

丸山キヨコ寄贈 資料撮影:土田ヒロミ

丸山守一さん(当時64歳)は、材木町で営んでいた塩田鉄工所で被爆しました。現在も遺骨は見つかっていません。息子の博さん(当時16歳)は被爆後に復員して広島へ戻った時、自宅兼工場の焼け跡から唯一このプライヤーを見つけました。鉄などの加工をする職人だった守一さんが愛用していたもので、博さんはこれを「親父の形見じゃけえ」と2021年(令和3年)に亡くなるまでずっと大切にしていました。

かばん

山本泰也寄贈 資料撮影:土田ヒロミ

山本照夫さん(当時12歳)は県立広島第一中学校の1年生で、建物疎開作業に動員され、被爆しました。このかばんは、被爆当日に照夫さんが持っていたものです。顔や両腕に火傷を負い、8月20日に救護所となっていた市立第一国民学校の講堂で家族に見守られながら亡くなりました。



山本照夫さん



「突然「あ、仏様が、あ、お母ちゃん」手を差しのべて抱かれて行く様にそのまま息をひきとって行きました。」

(照夫さんの兄の山本幸男さん、姉の木村富子さんの手記『ゆうかりの友』1974 広島県立一中被爆生徒の会著より)



新田タメ子さん

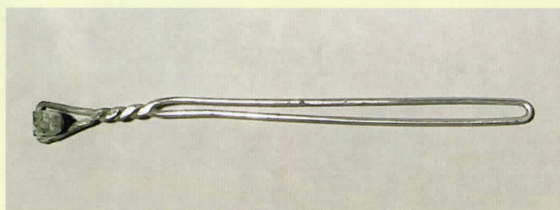
硬貨、髪留め、指輪

爆心地から470m 左官町
新田英明寄贈

これらは新田タメ子さん(当時39歳)の遺品です。

髪留めと指輪は、被爆時に身に着け、硬貨は持っていたものと思われます。

タメ子さんは自宅で二男の正紀さん(当時11歳)と共に被爆し、亡くなりました。



妊産婦手帳

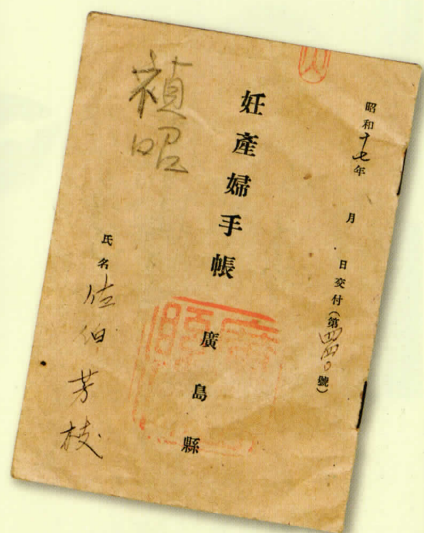
爆心地から2,000m 打越町 佐伯正夫寄贈

佐伯芳枝さんが、長男・禎昭さんを妊娠中に発行された「妊産婦手帳」です。

禎昭さん(当時2歳)は芳枝さん(当時25歳)と一緒に被爆しました。被爆直後は特に不調ありませんでしたが、9月10日ごろから血便の症状が出て、止まらなくなりました。薬もなく、日に日に弱っていき、父親の文造さんがドクダミを煎じて飲ませたり、鍼灸院でお灸も試しましたが、効果はなく、10月16日に亡くなりました。



佐伯禎昭さん



黒い雨を浴びた金屏風

爆心地から3,600m 古田町
増田理・増田孝寄贈

金屏風は1945年(昭和20年)8月6日当日、古田町古江にあった増田清さん(当時39歳)の自宅に立ててあったものです。原爆の爆風により家の屋根が瓦ごと吹き飛び、その後降り込んだ黒い雨の痕が残りました。

戦後も自宅の床柱には飛び散ったガラスが突き刺さったまま残っていました。また、家の内部の壁にも黒い雨の痕が残っていました。



広島文理科大学留学生の遺影

周一川寄贈

中国大陸から広島文理科大学に留学していた張秀英さん(後列中央・当時26歳)は、原爆で遺骨も不明となりました。爆心地から約500メートルの塚本町にあった留学生の女子寮から通っていました。同級生の張淑蘭さん(右端・当時24歳)は、1945年(昭和20年)4月30日の空襲により亡くなりました。



藤本家の家族写真

1940年(昭和15年)～1941年(昭和16年)ごろ

藤本征利寄贈

藤本初子さん(左端・当時39歳)は、中島本町で喫茶「アキツキ」を営っていました。

長女の初子さんを初め、写真に写る藤本家の全員が被爆し、遺骨の確認すらできませんでした。



米田京染店の家族写真

1934年(昭和9年) 米田博提供

天神町(現在の平和記念公園)にあった米田京染店の家族写真。店を営んでいた長男の米田吉清さん(後列右端・当時38歳)、二男の秀三さん(後列中央・当時35歳)、母親の道代さん(前列左端・当時60歳)が店内で被爆し、亡くなりました。東京帝国大学の学生で千葉県にいた五男の博さん(前列中央・当時22歳)は、被害を免れました。

米田博さんと母親の道代さん

1945年(昭和20年)2月 爆心地から230m 中島本町
米田博提供

原爆投下の半年前に撮影されたものです。

被爆を免れた博さんは、自身の日記に広島に家族の状況や恋人の浩子さんや周りの人に心配をかけまいとする様子を記しました。

8月8日 水曜日 曇

「心配でしょう」と言って呉れる人に「心配だ」と正直に言うて了えない。でも甘えて泣きくずれたい気持にはなる。浩子さんが何も言わないで居て呉れるのは有難い。

(米田博「新型爆弾」原稿(当時の日記から抜粋したもの)より)





陸軍船舶司令部写真班

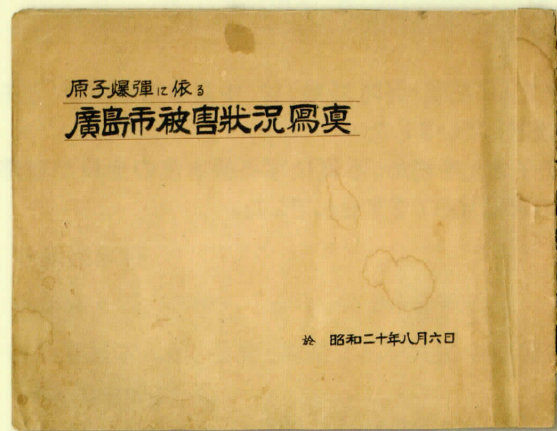
川原祐一・陰山良子寄贈

川原四儀さん(前列左端・当時23歳)は陸軍船舶司令部の写真班員でした。四儀さん、尾糠政美さん(後列左端・当時24歳)の2人は原爆投下後、軍の命令で市内の惨状を撮影しました。

全焼した市内電車

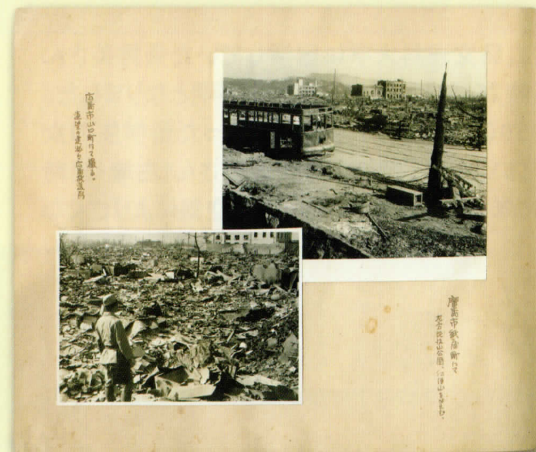
1945年(昭和20年)8月12日

爆心地から300m 紙屋町交差点東側 川原四儀撮影



写真帳「原子爆弾に依る広島市被害状況写真」

川原祐一・陰山良子寄贈



全焼全壊し瓦礫と化した街

1945年(昭和20年)8月9日

爆心地から1,200m 下柳町 川原四儀撮影



水筒

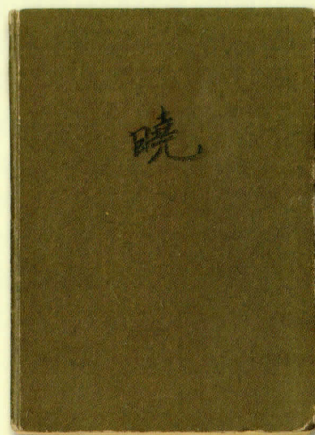
爆心地から2,200m 皆実町一丁目 新井好雄寄贈

この水筒は船舶通信隊補充隊(通称:暁16710部隊)に所属していた新井好雄さん(当時19歳)が被爆時に持っていたものです。被爆後、救護活動に従事した際、火傷を負った人たちが「水をくれ。水をくれ。」としがみつきました。しかし、「水を飲ませると死ぬ。やってはいけない。」と言われた為、中の水を捨てるしかありませんでした。

手帳

新井好雄寄贈

この手帳は好雄さんが戦後に軍隊生活や被爆時の状況、救護活動についてまとめたものです。好雄さんが救護した16歳の特別幹部候補生の事などが記されています。



天満町上空から北東を望む

1945年(昭和20年)9月～10月上旬ごろ

爆心地から1,080m 天満町 Lorraine Blake寄贈

写真手前左から天満橋、天満橋(仮橋)、天満町電車専用橋が写っています。右奥の建物は光道学校です。



福屋新館南東側付近から南に向かって

1945年(昭和20年)9月～10月ごろ

爆心地から750m 八丁堀 中野忠男撮影 下田博章寄贈

中央奥に見える建物は多田小児科です。その左側奥にうつすらと似島が写っています。

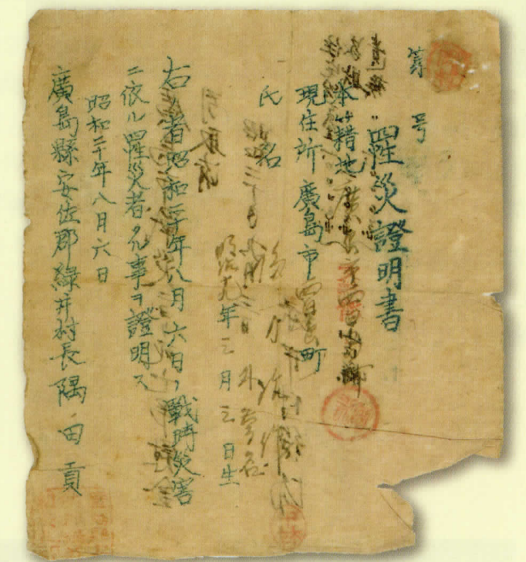


鉄びん

爆心地から260m 紙屋町

森澤展裕寄贈 伊藤豊旧蔵

当時、芸備銀行副頭取だった伊藤豊さんが勤務先の芸備銀行本店で見つけたものです。取っ手の部分の文様に埋め込まれた銀が一部溶けたように見え、被爆後の火災の高熱によるものと考えられます。



罹災証明書

爆心地から1,350m 西白島町 福万考一寄贈

福万治作さん(当時57歳)と被爆した家族3名の罹災証明書です。治作さんは自宅で妻のシゲさん、三女のカメ子さんと共に被爆しました。家の下敷きになりましたが、なんとか這い出し、自身は泉邸(現在の縮景園)で一夜を明かしました。8月8日に親戚の人の家で、シゲさんと動員先で被爆した四女の春江さんと再会しました。カメ子さんも15日に家族の元にたどり着きましたが、火傷を負ったシゲさんの具合が良くなく、24日に亡くなりました。

復興に向かう街と人々の姿

焼き尽くされた街で人々は再建に向けて歩み始めました。

物資の不足に苦しみながらも家建て、懸命な努力のもと、平和を願う街をつくっていきました。新たに授かった命に喜び、再建した店に期待を膨らませ、かつての日常も徐々に取り戻したかに見えました。しかし、火傷の跡はケロイドとなり、亡くした命に対する悲しみや悔しさ、自身の心身に残る傷を抱えながら日々を過ごしました。



広島駅前で路面電車を待つ人々

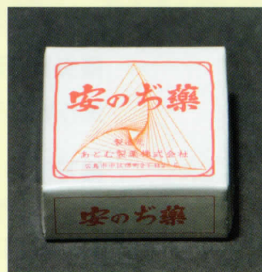
1946年(昭和21年)～1947年(昭和22年)ごろ
爆心地から1,800m 松原町 The Morgan Family寄贈

広島駅前で撮影したものです。被爆後、広島駅前では「ヤミ市」が発生し、多くの人々が集まり、広島で最も活気のある場所になりました。



安の目薬(練薬)

寺岡雅義寄贈



安のち薬(練薬)

渡邊路維寄贈



ゆび一切の妙薬

石津靖彦寄贈

あとむ製薬株式会社は、被爆から3年後の1948年(昭和23年)に瀬野の石津恭三さんが設立した医薬品製造会社。経営には、安の原田家、瀬野の石津家、十日市の寺岡家、堺町の渡邊家が関わっていました。製造していた薬は広島に投下された原爆から名付けられた「ピカドン」という商標登録のもと販売され、会社は1994年(平成6年)まで営業を続けました。



中国新聞社新館から北西を望む

1946年(昭和21年)2月～5月ごろ 爆心地から870m 上流川町
Alexander Arkinson Dunn撮影 Fay Sicker寄贈

写真手前に被爆後に建てられたバラックが写っています。



原爆記念品の瓦と木箱

木村英樹寄贈

戦後の一時期、被爆した瓦が「原爆記念品」として配布または販売されていました。

その際、瓦が木箱に納められていたものもありました。

松重美人さん一家の正月写真

1947年(昭和22年)1月 爆心地から2,800m 翠町
井下加代寄贈

最後列左端に被爆当日の市民の惨状を撮影した中国新聞社の松重美人さんが写っています。この写真は、松重さん一家を翠町の理髪店兼自宅の前で撮影したものです。理髪店は妹夫婦(最後列右)が営み、妻のスミエさんも手伝いました。理髪店は爆風を受け、ガラスや窓枠が吹き飛び店内に散乱しました。それでも店はすぐに再開し、現在も同じ場所で営業しています。



県立広島第二中学校の同級生たちと共に

1947年(昭和22年)ごろ 爆心地から1,790m
西観音町二丁目 青山念海寄贈

県立広島第二中学校4年生だった青山(旧姓:香月)念海さん(当時16歳)は、動員先の南観音町の工場で被爆しました。翌日から母親のヒサコさんの行方を捜し、8日に西蓮寺の自宅の焼け跡でヒサコさんの遺骨を見つけました。念海さんは母親の死や爆心地近くで見た当時の惨状を長い間、話すことはありませんでした。



広島郵便局殉職供養塔前で花束を捧げる二人の女性

1947年(昭和22年)8月1日 爆心地から80m 細工町
赤石幸夫寄贈

爆心地からわずか80メートルの場所にあった広島郵便局では、出勤していた職員や動員学徒など200名以上が犠牲になりました。焼け跡には生き残った職員の手で供養塔が建てられました。

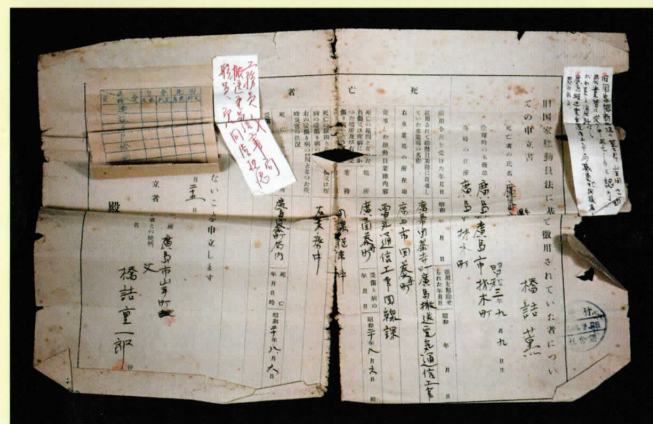




被災状況地図

広島県立広島国泰寺高校寄贈

広島市の地図に県立広島第一中学校（現在の広島国泰寺高校）の職員や生徒たちの被災した場所と死亡者数、生存者数を示したものの。被爆から2年後の1947年（昭和22年）ごろに調査したものと考えられます。学校内の死亡者数が292名となっており、学校近くの雑魚場町の建物疎開作業に動員された生徒たちも含まれていると思われます。土橋付近、鶴見橋は3年生の生徒の一部が建物疎開作業に動員された場所でした。



橋詰薫さん

申立書

個人寄贈

橋詰薫さん（当時16歳）は被爆の前夜、国泰寺町で宿直勤務をしていました。薫さんの両親は被爆後に市内各地を捜し回りましたが、薫さんの行方は分からず、同年9月13日に広島西警察署に死亡を報告しました。資料は薫さんが旧国家総動員法に基づいて徴用され死亡したことを、父親の橋詰重一郎さんが1952年（昭和27年）7月25日付で申し立てたものです。

大本さん親子と佐々木禎子さん

1955年（昭和30年）8月11日
千田町一丁目 大本喜美枝・大本裕之寄贈

広島赤十字病院の庭で撮影された写真です。大本裕之さん（前列左・当時2歳）は1955年（昭和30年）5月に広島赤十字病院に入院しました。裕之さんの向かいの病室では佐々木禎子さん（後列右・当時12歳）も闘病していました。「（禎子さんの）千羽になると自分の病が治ると信じ、ベットの上で折り続けていた姿が、今もなお私の脳裏から消えようとはしません。」

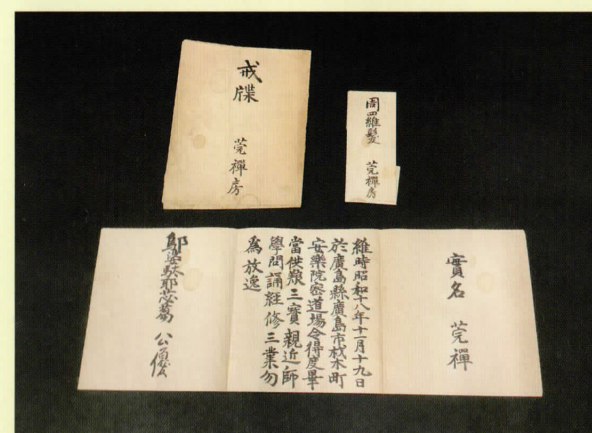
（裕之さんの母、喜美枝さん（後列左）の手記より）



戒牒

大西茂子寄贈

中島国民学校4年生だった大西佳夫さん（当時10歳）のものです。1945年（昭和20年）4月、佳夫さんは材木町にあった自宅の安楽院を離れ、集団疎開していました。原爆の投下により、爆心地から450メートルの場所にあった安楽院は全壊全焼しました。佳夫さんは安楽院の後継ぎとして1943年（昭和18年）11月に得度式を行い、僧としての「莞禪」という名をもらっていました。しかし、原爆によって壊滅した安楽院の再興は叶いませんでした。



原爆記録画

土居一典寄贈

作者の土居晩鐘さん（本名 土居賽太郎さん）は、戦後に広島市内に住み、アマチュアの画家として活動しました。被爆の惨状を後世に伝え、亡くなった人々を供養するために、被爆者から当時の話を聞くなどして原爆記録画を描きました。



第一集 感想録

1952年（昭和27年）ごろ

この資料は第一回原爆記録画展が広島大学で開催されたときのものです。学生など来場した人々の感想がまとめであります。



「銀山町」（上）

「燃える街路樹 紙屋町」（下）

制作年 1955年（昭和30年） 土居晩鐘作



島本学さんと妻の美智子さん

1955年（昭和30年）ごろ 佐伯郡五日市町下河内
島本睦子寄贈

島本学さんの実家は爆心直下の細工町にあり、理髪店を営んでいました。原爆により自宅は焼失し、父親の島本秀吉さん（当時53歳）は顔や手に火傷を負い、亡くなりました。出征していた学さんは戦後、親戚の家に身を寄せましたが、病気がちで入院を繰り返しました。故郷の細工町で父親の跡を継ぎ、理髪店を再興する事を願っていましたが、区画整理などの理由から断念しました。新たな場所に店を開き、妻の美智子さんと共に営みました。

A No 66702

広島平和記念資料館
常設展示



割引券 (65歳以上) 100円

(当日1回限り有効・消費税込み)